

令和 6 年 6 月 5 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K12477

研究課題名（和文）逆境体験を抱える非行女子のためのトラウマ心理教育プログラム開発に関する実践的研究

研究課題名（英文）Practical Research on the Development of a Trauma-Informed Psycho-education Program for Delinquent Girls with Adverse Childhood Experiences

研究代表者

坂東 希 (BANDO, Nozomi)

大阪大学・大学院人間科学研究科・特任講師

研究者番号：60388626

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、児童自立支援施設の女子児童を対象にしたトラウマ理解に基づく心理教育プログラムを開発することを目的に、1) 逆境的小児期体験（Adverse Childhood Experiences: ACEs）の把握方法等に関する文献調査を実施し、子どものトラウマ体験の安全かつ適切な把握について検討し、2) 児童自立支援施設に入所している女子を対象とした教育プログラムの実践記録から、自己理解と変化のプロセスとトラウマの影響について検討し、3) 同施設の職員を対象とした伝達研修を通して、同施設の女子児童のACEsとトラウマの影響ならびに適切な介入のあり方について検討し、これらの成果を論文等にまとめた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本における非行・犯罪行動への介入にトラウマインフォームドケアを導入することへの関心は高まりつつあるものの、実践は試行的に進められている段階であり、実践事例を蓄積していく必要がある。本研究は、グループアプローチによる心理教育プログラムを実施し、その介入におけるトラウマの影響を具体的に考察したものであり、新規性が高く、実践事例の一つとして位置付けられる。また、逆境や非行行動を抱える子どもへのトラウマの理解に基づいた適切なケアと心理的支援のあり方は、実務家による関心も高く、社会的ニーズに沿ったものであり、本研究成果を資料として、今後より詳細な検討につながることを期待できる。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to develop a psychoeducation program based on understanding trauma for girls in children's self-reliance support facilities. The research involved: 1) conducting a literature review on methods for understanding Adverse Childhood Experiences (ACEs) to explore safe and appropriate ways to comprehend children's trauma experiences; 2) analyzing practice records of an educational program for junior high school girls in these facilities to examine the process of self-understanding, changes, and the impact of trauma; and 3) conducting training sessions for staff at children's self-reliance support facilities to investigate the girls' ACEs, the effects of trauma, and appropriate interventions. The findings from these steps were compiled into academic papers and other publications.

研究分野：教育心理学

キーワード：非行 児童自立支援施設 逆境的小児期体験 トラウマインフォームドケア 心理教育

様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

近年、少年司法制度に係る少年の背景には虐待やネグレクト、家族機能不全等の逆境体験があり、とくに女子児童にその割合が高いことが知られつつある。被害体験やトラウマは重大な健康リスク要因であり、教育や支援の効果に影響を及ぼすだけでなく、対人関係の持ち方や出産・育児等を含むその後の生活に多大な影響を及ぼす。したがって、非行臨床においてもトラウマを念頭に置いたケアや介入を通して子どもたちの行動を適切に理解し、トラウマ症状を適切に扱うことで自他を傷つける問題行動を減らすことが喫緊の課題であるが、国内ではその実践・研究は十分ではない。

非行・犯罪行動への治療的介入については、欧米において、犯罪行動を支える反社会的認知の修正を主とする認知行動療法的アプローチが開発され、80年代には再発防止モデルが組み込まれて、一定の再犯率低下効果が実証され、専門職によって実施されている。国内でも、法務省の「刑事収容施設及び被収容者等の処遇に関する法律」（平成18年、19年改正）により、作業のみであった矯正処遇に改善指導・教科指導が加わり、欧米諸国で実証されてきた認知行動療法ベースのプログラム等が導入されるようになってきた。犯罪や非行に対する矯正教育では、主に反社会的な非機能的認知に焦点を当て、健全な生活習慣と対人関係の構築等を目指した取り組みが行われてきたが、その限界も指摘されている（藤岡，2014）。その一因として、犯罪や非行に至る人のなかには虐待や暴力等の被害を経験している人が少なくないことが挙げられる（科学警察研究所，2007）。平成30年版の犯罪白書では少年院入院者の被虐待経験者数では女子の方が被虐待経験ありの構成比が高くことが示され（法務省，2018）、また、児童自立支援施設においても特に女子児童にPTSD症状などが多いことが明らかとされつつある（野坂，2011）。

他方、トラウマに関連する実務、研究においても欧米諸国における取組が盛んである。トラウマを念頭に置いたケアが、欧米諸国広がりを見せている背景には、米国疾病対策予防センター（CDC）が実施した逆境的小児期体験（Adverse Childhood Study: ACEs）に関する大規模調査（Felitti et al., 1998）をはじめとするACE研究がある。ACEsを有する多くの人たちが、その後の人生において医療や精神保健福祉サービスの利用者となったり、司法と関わったりする可能性が高いことが明らかとなり、医療・教育・福祉・司法等様々な領域で「トラウマを念頭に置いたケア（Trauma-Informed Care: TIC）」が必要であると認識されつつある（Harris & Fallot, 2001; Substance Abuse and Mental Health Services Administration, 2014）。欧米の非行・犯罪臨床においても、TICの導入が図られつつあり、国内の非行臨床においても、これまでの支援方法に加え、トラウマの影響と対応に関する適切な情報を周知し、対象者のニーズに応じたより質の高い介入を可能にする必要がある。

2. 研究の目的

本研究では、児童自立支援施設のとくにトラウマ体験やトラウマ症状が多いとされる女子児童を対象に、トラウマ心理教育プログラムを開発することを目的とする。具体的には、初期のトラウマ症状に対応する心理教育プログラムとして米国で開発されたトラウマ・インフォメーション・グループや非行・犯罪行動の変化に効果が実証されてきた認知行動療法（CBT）や治療共同体（TC）等の研究を踏まえたグループ形式のプログラムの実践を通して、虐待等の逆境体験を抱えることが知られつつある女子非行少年の行動を支援者が適切に理解し、自他を傷つける行動変化を可能にする介入のあり方を理論と実践の両面から検討する。

3. 研究の方法

【調査1】海外の少年司法・児童福祉領域におけるACE研究やTIC実施に関する文献調査

欧米で導入が進んでいるトラウマ・インフォームド・ケア（TIC）やトラウマ・インフォメーション・グループ（TIG）等の先進的な知見をまとめる。また、英語圏における子どものACEの把握方法についても文献調査を進める。

【調査2】児童自立支援施設における女子児童の逆境体験と同施設の対応に関する実態調査

研究協力機関である児童自立支援施設の入所児童の逆境体験やトラウマ症状の実態を把握し、同施設の対応について明らかにする。施設職員に対してアンケート調査ならびにインタビュー調査を行う。

【調査3】児童自立支援施設における女子児童を対象としたプログラム開発

認知行動療法（CBT）や治療共同体（TC）などの実践研究による知見、グループ・アプローチの手法を活用したプログラムの実施ならびに実施記録の分析を行う。

4. 研究成果

(1) 文献調査

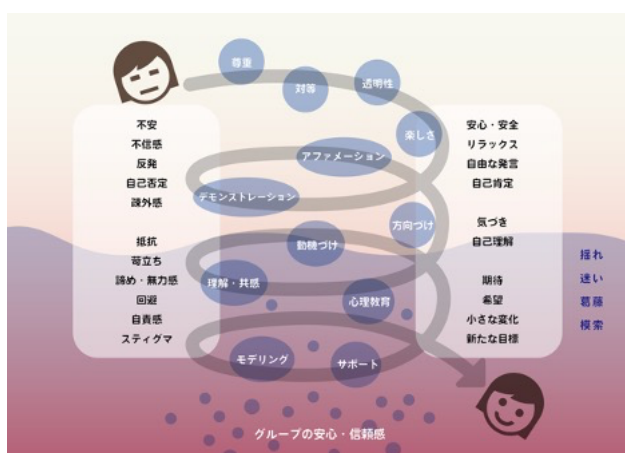
非行・犯罪行動を有する少年や成人の被害体験と精神的な影響について実態を明らかにするために、国内外の文献調査を実施した。また、逆境的小児期体験（ACEs）の把握方法の一つとして

欧米で急速に広まっているスクリーニングに関する海外文献（22 件）のレビューを実施した。ACE のスクリーニングの潜在的リスクについては、さまざまな調査によって検証されつつあるものの、WHO が示したスクリーニング原則にある「利点が弊害を上回る」ほどの一貫した研究結果は示されていない。ACE などトラウマ体験を聴取する調査は、回答者にとって負担の大きい調査であるため、十分な配慮と準備がないままに聴取することには注意を要する。本結果は、「逆境的小児期体験（ACEs）のスクリーニング導入に関する文献レビュー」（『子どもの虐待とネグレクト』24(1), 2022 年 5 月）にまとめた。

(2) 児童自立支援施設における女子児童を対象としたプログラムの分析

児童自立支援施設に入所している中学生女子（7 名）を対象とした教育プログラムの実践記録から、自己理解と変化のプロセスを明らかにし、そのプロセスにおけるトラウマの影響について検討した。プログラム開始初期は、グループへの不信感や反発が強く見られるものの、グループの安全を感じるにつれて自己理解や変化への動機付けが高まり、その後も変化への期待と葛藤を繰り返しながら、自分の目標を見つけ、グループ内や生活場面での新たな方法を試し、自身の肯定的な変化に気づいていく過程が見出された。グループの展開と子どもの変化の関係を検討するなかで、参加者にとって安全なグループをつくるのが、子ども自身の否定的な気持ちも含む正直な気持ちを話すことを促し、感情認識や伝達など新たな対人関係スキルの習得につながる可能性も示唆された。このようなプロセスは段階的に生じるものではなく、行きつ戻りつしながら徐々に体験が深められていくという螺旋状の過程であると考えられ、グループで起こる子どもたちの心理的変化やダイナミズムをモデル図として示した（下図）。

子どもたちが自己理解を深め、新たな行動を選択できるよう支えるグループを形成するためには、初期のうちから子どもたちの否定的な反応を出せるようなスタッフの受容的な態度が求められる。また、プログラムのなかで見られた、トラウマの影響と思われる反応に気づき、適切に対応するためにも、継続的なスタッフの訓練やチームづくりを課題として挙げた。本成果は、「非行行動のある少女の自己理解と変化を支える一児童自立支援施設におけるグループ実践から」（『子ども学』11 号, 2023 年 5 月）にまとめた。



図：グループワークにおける自己理解と変化のプロセス

(3) 児童自立支援施設の職員を対象とした質問紙調査の実施

児童自立支援施設の職員を対象とした ACEs に関する伝達研修を実施し、その前後で職員を対象とした質問紙調査を実施した（研修前； $n=30$ ，研修直後； $n=31$ ，研修終了から 3 か月後； $n=27$ ）。調査の結果から、同施設での ACEs 把握の実態や、入所児童の ACEs やトラウマ体験を把握することに関する職員の認識と研修後の認識の変化、入所児童の ACEs の把握やトラウマ反応等への対応に関する苦慮や工夫等が明らかになった。

(4) 実務家を対象とした研修の実施

児童福祉や教育、司法領域において非行行動などを有する子どもにかかわる実務家を対象とした研修を通して、本研究から得られた知見など成果を発信した。他領域の実務家からトラウマ理解に基づく支援についてフィードバックを得ることもでき、本研究の新たな課題について検討する機会となった。

まとめ

新型コロナウイルスの影響で、当初予定していた調査計画を一部変更せざるを得ないものもあったが、本報告に示した調査から、児童自立支援施設における逆境体験と非行行動を有する女子児童の行動変化への介入プログラムのあり方について検討した。本研究においても、TIC は、本人とスタッフの安全感を高めるアプローチであり、支援の現場における子どもたちの反応に対してスタッフが抱きうる恐れや抵抗を軽減し、関心と共感を高める手助けとなりうることで部分的であれ示されたといえる。米国では、少年司法手続きに係属する若者の多くが何らかのトラウマ体験を有することを踏まえ、トラウマインフォームドな少年司法制度（Trauma Informed Juvenile Justice）への転換が提案されるなど本領域における適切な介入のあり方に関する実践研究も日々更新されている（Oudshoorn, 2016）。国内においても関心が高まりつつある TIC の考え方を幅広く共有することで、本研究で注目した児童自立支援施設という環境に加え、家族や学校、地域社会など、施設を出た後の本人を取り巻く環境においてもこうしたアプローチを可能にする変化を期待したい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 坂東希	4. 巻 11
2. 論文標題 非行行動のある少女の自己理解と変化を支える 児童自立支援施設におけるグループ実践から	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 子ども学	6. 最初と最後の頁 69-89
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 坂東希・野坂祐子・毛利真弓・藤岡淳子	4. 巻 21
2. 論文標題 児童・思春期における性問題行動への治療的介入の現状と課題	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本司法福祉学研究	6. 最初と最後の頁 82-100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 毛利真弓・坂東希・藤岡淳子	4. 巻 21
2. 論文標題 大阪府による性犯罪者への治療的介入	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本司法福祉学研究	6. 最初と最後の頁 101-120
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 坂東希・野坂祐子	4. 巻 24(1)
2. 論文標題 逆境的小児期体験の把握と活用方法に関する文献調査	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 子どもの虐待とネグレクト	6. 最初と最後の頁 322-332
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 坂東希	4. 巻 72(9)
2. 論文標題 トラウマインフォームドケアの視点から少年の行動を理解する	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 更生保護	6. 最初と最後の頁 28-32
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 坂東希
2. 発表標題 トラウマインフォームドケアの概念、研究、実践の動向
3. 学会等名 日本更生保護学会第9回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 坂東希, 毛利真弓, 藤岡淳子
2. 発表標題 大阪府による性犯罪者への入口支援 (地域再犯防止推進モデル事業) (1)
3. 学会等名 日本犯罪心理学会第58回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 毛利真弓, 坂東希, 藤岡淳子
2. 発表標題 大阪府による性犯罪者への入口支援 (地域再犯防止推進モデル事業) (2)
3. 学会等名 日本犯罪心理学会第58回大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 掛川直之・飯田智子編著（坂東希）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 旬報社	5. 総ページ数 296
3. 書名 出所者支援ハンドブック	

1. 著者名 藤岡 淳子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 有斐閣	5. 総ページ数 324
3. 書名 司法・犯罪心理学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------